

「鶴居の子ども達が 霧多布湿原を体験しました」

KODOMO湿地交流つるい委員会副委員長 原 田 修

8月10日に、鶴居村の小中学生13名がKODOMO湿地交流*の活動で、浜中町の霧多布湿原を訪れました。テーマは「釧路湿原と霧多布湿原の違いを知ろう」、「森・湿原・海のつながりを感じよう」の2つです。

まずは道道53号沿いの展望地で釧路湿原を見渡し「広い」、「木がいっぱいある」と感じてから霧多布へ。しかし霧多布湿原を一望できるはずの琵琶瀬展望台では、海霧で何も見えません。看板の写真を見て「晴れたらこんな景色なんだ」と子供達の反応はいまひとつでした。その後、奥琵琶瀬木道では雨も上がり、「ここは草の高さが低いね」「塩性(えんせい)湿地といって、海に近いから潮の満ち引きがあるし、塩気もあって、釧路湿原のように背の高い草や木はあまり生えないんだよ」と説明しているうちに霧が晴れてきました。急いで展望台へ戻ると、今度は「はっきり見える!」。今朝見て来た釧路湿原との違いは「湿原のすぐそばに家がある」「木が少ない」と子供達の発言も活発になりました。

霧多布湿原センターでの昼食は、海鮮ピラフ、とろろ昆布のスープ、キャベツの塩昆布和え、鶏の唐揚げ等がバイキングで食べ放題。中には3回お代わりする子もいました。実は浜中の海産物を使った料理で「森・湿原・海のつながり」を感じてもらい、というねらいがあったのですが、湿原センター職員の説明を子供達はどれくらい理解してくれましたでしょうか(大人は腹の底から実感しました!)

午後は湿原センターのプログラム「長靴トレッキング」を体験しました。ぬかるんだ道を歩きながら「川の水はどうして赤いの?」「それは泥炭という湿原の成分に鉄が含まれているからだよ」「なんか油が浮いているみたい」「手に付けて匂いをかぐと鉄臭いよね。この水が海に流れていくと、昆布の大事な栄養になるんだ」。そして小さな沢で、たも網で生き物を探しました。鶴居にもいるヨコエビやカワゲラ等の水生生物に加え、ウキゴリ(魚)やコガタカワシンジュガイ(貝)も見つかり、釧路湿原との違いも知りました。こうして五感で霧多

布湿原に触れ、帰りの車内では、高学年はしっかりその違いについて発言し、低学年の子は「昼ごはんがおいしかった」「水遊びが楽しかった」と、湿原を満喫してくれたようです。

霧多布湿原は釧路湿原の6分の1程の広さですが、森、湿原、海という環境がまとまって見られ、自然と人の生活圏が近いのが特徴です。鶴居の子供達が今回の体験を通じ、自然の恵みや釧路湿原についてあらためて何かを感じてくれれば嬉しいです。

* KODOMO 湿地交流は、2017年に全国の子供達を招き鶴居村で開催された「KODOMO ラムサール in 鶴居村」が高評価を得たことから、鶴居村の子供達の自然体験・交流の機会を設けようと、村からの補助を受けて毎年小中学生を対象に子供行事を行っています。これまで道央圏でタンチョウが生息する長沼町の子供達との交流を行っています。



琵琶瀬展望台にて